

# ローベルト・ムージルの 『ポルトガルの女』について

前田 織 絵

## 1. はじめに

ローベルト・ムージル (Robert Musil 1880-1933) の短編『ポルトガルの女』*Die Portugiesin* (1923)<sup>1)</sup>は、短編集『三人の女』*Drei Frauen* (1924) に収められている作品である。『三人の女』は、神話的であるとしばしば言われているが、神話的世界というよりは、主人公の男性とは決して相容れない異質性<sup>2)</sup>を備えた存在としての、神話的な女性像としての三人の女性<sup>3)</sup>が浮かび上がる。三人の女性は、女神として、聖女として、そしてまた、母親の像として主人公の男達の前に現れる。

『ポルトガルの女』においては、その異質性により相容れない、「男の世界」と「女の世界」の対立、そして融和が描かれている。本稿においては、自らの属する世界に基く「性格」故に、ポルトガルの女と対立する、ケッテン殿の内面において、二世界が統合されて行く様を、彼の実体 (Wesen)<sup>4)</sup>の変化に焦点をあて、考察を行なう。

## 2. ケッテン殿とポルトガルの女

『ポルトガルの女』は、『三人の女』の他の二作品と比較してみると、物語らしい構成をとっていると言われる。ムージルのイタリア遠征の経験を素材にしていると言われるこの作品は、一見中世を舞台にしたありきたりな物語にも見えるが、しかしながら、一つの物語として非常に緻密な構成を持っているのである。その概要は次のとおりである。

北イタリアの山中の岩壁の上に城を構え、ケッテンの領主は祖先からの慣しに

従って、良い子孫を得る為に、美しいポルトガルの女を妻に迎えたが、産期の近い妻を連れ帰ってすぐ、トリエントの司教との十一年にも及ぶ戦に出ることになる。曾祖父の時代から、ケッテン一族とトリエントの司教とは、幾つかの土地の帰属を巡って係争関係にあったのである。しかし、司教は病没し、四代に渡る抗争は終結し、帰途にケッテンは蠅に刺されて発病し、生死を彷徨うことになる。快復の兆しは現れたが、実体の一部が先に死んでしまったために、彼はもはや奇蹟が起こらなければ、再びこちらの世界に戻ってくることは不可能に思われる程であった。しかし、城に突然現れて住み着いた猫が病にかかって死んだことを殉死であるかのように痛感したケッテンは、少年の頃果たさなかった城の絶壁の拳登を奇蹟的に達成し、再び元の力を取り戻し、物語はポルトガルの女とケッテンの領主の融和的な結末で締めくくられている。

『ポルトガルの女』を前提部分もしくは伏線部分と、後半部分に分割した場合、この伏線部分において、詳細な状況、人物描写といった説明的内容が緻密に成されることによって、後半部分における必然的結果がもたらされるという厚みある構成を可能にしているのである。『ポルトガルの女』においては、停戦、発病までを伏線部分、それ以降を後半部分と見ることが出来る。ムージルはこの前半部分において、主人公のケッテン殿の性格と、ポルトガルの女の性格を、その生い立ちも含めてかなり詳細に描いている。そしてこの二人の性格の対比によって、この作品における二重構造ともいうべきものを創り出しているのである。

ポルトガルの女の性格に代表される世界は、「美しい」(schön, P-253)、「愛する」(lieben, P-254)、「紺碧の海」(das pfaublaune Meer, P-255)、「真珠の首飾り」(Perlenketten, P-254)、「月の如く」(wie der Mond, P-259)、といった美しいものを象徴するような、神秘性を秘めた不思議な女性の性格である。これに対してケッテン殿の方は、「短刀」(Messer, P-253)、「荒々しい」(wild, P-256)、「醜い」(häßlich, P-255)、「白昼の如く明るい」(taghell, P-253)、「緑」(grün, P-255)、「狼」(Wolf, P-255)のように、山国の、そして気性の荒い論理的直線的行動性に富んだ好戦的な男性の性格である。両者は夫婦とはなっても、本来別の世界に属するものとして、仮初の結び付きしか見出すことが出来ず、この二つの世界の属性は互いに対立し合う。実際、物語の中において、ケッテン殿、

狼、夫婦の二人の息子達は男の世界に属するものとして、そして、ポルトガルの女、トリエントの司教、ポルトガルの女の幼馴染は女の世界に属するものとして描かれており、このことは、司教との戦いにおいて、その司教の戦闘のやり方を女性的であるとしていること<sup>9)</sup>からも、この戦いが男性と女性の戦いとして描かれていることは明確である。

二つの世界には明らかに厳しい境界が引かれている。妻であるポルトガルの女にとっては夫であるケッテン殿の世界が不思議で神秘的であるが如く、夫にとっても、妻は魅惑的な美に包まれた神秘的な存在である。また一方で、二人の息子達は、長期間戦いに出ている父親を情熱的に愛し、しかも父親と同じ環境に生まれ育った為に、彼女にとっては夫の世界に属するものとして捉えられている。

停戦とケッテン殿の発病を境に物語は後半に移るが、後半においては、ケッテン殿の受難と克服、そして二つの世界の融和が語られることになる。この停戦と病の発症によって、ケッテン殿は、その武人としての性格（Wesen）を完全に喪失してしまっている。彼がこの時点まで備えていた性格とは、ケッテン人に代々伝わる先祖譲りの性格であり、これは司教との戦いに勝つという使命に支えられたものであったと言えよう。しかし、司教の病没で思いがけず勝利を手に入れたことで、彼の存在理由は危うくなる、即ち、その武人としての性格の必要性を喪失したことにより、彼が存在し得る為には、新たな性格を獲得することが必要となる。それは、ただ単に彼の存在理由を得るということだけではなく、彼が愛する対象としてのポルトガルの女との愛に融和をもたらすのは、元の「先祖ゆずり」の性格とは別の、固有の性格を獲得することにより、新たな世界へ登ることである。

### 3. 性格と実体

『ポルトガルの女』において、ケッテン殿は「性格」を備えている。それは、ケッテン人に代々受け継がれてきた、先祖ゆずりの性格であって、戦いを前提とした、「短刀や槍で戦う」(P-539)<sup>9)</sup>武人の性格である。それは、物語の冒頭部分において、次のように述べられる。

その一族は様々な古文書にデレ・カテネ (delle Catene) の名で現れ、また別の古文書ではケッテン殿 (Heren von Ketten) と呼ばれていた。一族は北方から下り、南国の関を前に停止した。彼らは利益の命ずるままに、ドイツあるいはロマン系への帰属を使い分けたが、結局は自分自身をたのんで、どこへ属するとも思っていなかった。(P-252)

まず、この冒頭部分から、独立自尊の一族としてのケッテン一族の属性というものが伺える。そして、更に続く部分に「薄縁のように前に垂れかけたこの騒音を貫いて、如何なる外界の音もカテネ人の居城に侵入することは出来なかった。」(P-253) と記されているように、一族が外界とは非常に遮断された存在であったことが、彼らの性格を刻み続け得たのである。更に、ケッテン一族の名前そのものである「Ketten」が、「鎖」、「チェーン」、「連鎖」の意味を持ち、代々その性格が受け継がれたことを提示していると言える。そして、次の部分からは、そのケッテン人の性格というものを、更に詳しく読み取ることが出来る。

ケッテン殿は代々苛烈且つ緻密な性格をうたわれていた。広大な周辺のいかなる利益も彼らの眼を逃れることは出来なかった。一瞬の間に深々と切り込む短刀 (Messer) のように、危険だった。[中略筆者]彼らは手に入れることが出来るものは必ずものにした。その時次第であるいは実直に、あるいは強引に、あるいは狡猾に仕事に取り掛かったが、いつも変わらないのは、冷静な、逃れるすべもないまで獲物を追い詰める執拗な態度だった。短い彼らの生涯の歩みは緩やかだったが、するだけのことが成し遂げられてしまうと、何一つ死後にとどめることもなく終止符が打たれた。(P-253)

そしてまたケッテン一族が見せる途方もない力が、彼らの「眼と額」(Augen und Stirnen, P-253) から発せられていること、いかなる人物でさえ、六十路の声を聞く前に世を去るということも、皆共通しており、彼らが皆、中肉の華奢な身体つきで、美しい騎士であったことも、共通していた。彼らは、更に、その俊敏な「性格」を受け継いで行くために、そして、周囲のいかなる貴族とも利害関

係を持たないために、そして、美しい息子が望まれたために、遠方から美しい妻を娶った。彼らは新婚の一年間、美しい騎士ぶりを発揮したが、「彼らはこの一年間に見せたのが真実の自分なのか、その他の全ての年月の姿が本来なのか、それは彼ら自身にも分からなかった」(P-253)<sup>7)</sup>のである。

ケッテン殿はポルトガルの女を連れ帰るが、彼は曾祖父からの使命であるトリエントの司教との抗争に好機が訪れたために、すぐに戦に赴き、十一年馬上において、辛抱強く相手の隙をうかがい続けたのである。

父や祖父もそうやって待ってきたのだ。気長に待てば、滅多にないことがひょっとしたら起こるかもしれない [強調筆者] のだ。(P-257)

好機を待ち、ケッテン殿は代々受け継がれてきた武人としての性格を遺憾無く発揮し、指揮官としても有能であった。彼を戦いに駆り立てたものは、曾祖父からの使命と同時に、彼の武人としての性格によるものである。それ故、司教の急な病没によって思いがけずに勝利を得たとき、彼の存在理由は喪失してしまう。彼に残されたのは、「磨き上げ、整える」(P-261) ことでしかなく、それは領主の仕事ではもはやなかった。彼が存在し続けるには、新たな性格の獲得が、必要不可欠となるのである。

ここで物語は大きな展開を迎える。ケッテン殿は、城への帰途で、「一匹の蠅」(eine Fliege, P-261) に刺されたことにより、瀕死の熱病に襲われる。ここで彼を瀕死の重病に陥れたのが単なる「一匹の蠅」であったのは、それ程にケッテン殿が、「性格」の喪失によって存在の危機にあったということの象徴である。様々な治療の末、ケッテン殿が「熱いふっくらした灰の詰まった型」(P-261) でしかなくなった時、熱は下がったが、彼のそれ以降の経過は芳しくなく、彼の実体はまさに失われてしまったかのように、薄弱なものとなってしまふ。

眠っていることが多かったが、眼を開いていても放心したようだった。しかし、意識がよみがえると、この人任せの、子供のように暖かくて無力な肉体が自分の肉体とは思えなかった。ほのかな息吹にも震えるこの弱々しい魂

も、やはり自分の魂ではなかった。ことによると、もうしんでしまったので、今はただ何処か別の世界で、もう一度現世に戻るべきかどうか、じっと待ち続けていたのかもしれない。死がこれ程安らかなものだとは思ってもかけなかった。彼の実体の一部 (einem Teil seines Wesens) が先に死んだために、彼は一体の巡礼者のように解散してしまったのだ。骨はまだベッドに横たわり、ベッドも間違いなくここにあり、妻が身をかがめて覗き込んでいる、すると彼は、好奇心に駆られ、彼女の注意深げな顔の動きを眺めて気をまぎらす、だがそれにもかかわらず、彼が愛した一切は、もうずっと先の方へ行ってしまっていたのだ。ケッテン殿と彼の月夜の妖女は、この肉体から抜け出して、静かに彼方へ遠ざかっていた [強調筆者]。まだ姿は見えた、数歩大股で追って行けば、追いつくことが出来るだろうとは分かっていた、ただ彼には、自分がもうその二人と同じ世界に属しているのか、まだここにいるのか、分からなかった。[中略筆者] それから、あの日がやってきた、生きようと思う気力を振り絞らなければ今日が最期だ、はたとそう気付いた日が。熱が退いたのはその日の夕方だった。(P-262)

ケッテン殿は、生死を彷徨う熱病からは奇蹟的にも、「快復への第一歩」(P-262)を見出すことが出来たが、これは、彼が備えていたのが「先祖ゆずり」の性格であり、それに従ってトリエントの司教との戦いを遂行し、また、遠方から妻を迎えたのもあるが、「ポルトガルの女」を妻に選んだことは、彼自身の選択によるものであるからである。即ち、彼の実体の一部としての「先祖ゆずり」の性格は失われたが、彼自身に特有の個人的な性格が、未だ彼の実体のほんの一部として残されていたために、彼は存在し得たのである。よって、次に彼が成さなければならぬのは、新たな性格の獲得である。

ケッテン殿は如何にして性格を獲得することが出来るのか、そして、再びポルトガルの女とより高い段階での融和を迎え得るのか。彼が最初に行なったのは、ポルトガルの女が飼っていた、彼女にとっては「武人としての性格」を思い出させる「狼」を殺させることであった。彼は、これによって以前の性格を取り戻したいという期待があったが、これは功を奏せず、更に彼の頭蓋が小さくなったこと

も、彼の存在の危うさを象徴している。

快癒への第二段階をなかなか見出せないまま、ケッテン殿にとって、事態は更に芳しくない状況が続くのである。占い師が「あることを成就なされば殿は健やかにおなりでしょう」(P-265) というが、このあることを見出すことがなかなか出来ない。更に、ポルトガルの女の幼馴染の出現と、二人の接近において、いつもなら、手荒な行動に出るまでもなく巧みに客人を追い払うことが出来る彼が、それをすることすら困難なことも、彼の存在の危うさを象徴している。しかも、ポルトガルの女にとっても、彼女の愛していた「彼の独特の人柄」(seinem eigenen Wesen, P-255) や、「彼の人となり」(das Wesen dieses Mannes, P-255) を喪失してしまった彼に飽きてしまい気味であったため、彼が新たな性格を獲得することは、必要不可欠なこととなる。

彼が再び獲得しなければならない「性格」とは、元々の「先祖ゆずり」の武人としての性格ではないのである。先に、彼が、元々の武人の性格の象徴としての「狼」を殺すという試みによっても、性格を取り戻すことが出来なかったことから、それは明確である。では、彼はいかなる「性格」を、どのような方法で獲得すればよいのか。彼が辛うじて存在し得たのは、彼が自らポルトガルの女を選んだことにある。つまり、彼が妻の世界に憧れ、その魔法的な魅力を常に完全には捨て切れなかったことによると言えよう。

だが、これと別の性格は、月のようにけうとい遥かさだった。ケッテンの領主はこの別の生活を心密かに愛していた。(P-260)

以前、ポルトガルの女とケッテン殿を阻んでいたものがトリエントの司教との抗争であった如く、停戦後に彼らの間に割って入るものは、この幼馴染の出現と、彼の性格の喪失であるが、彼の先祖が持ち続けていた如く、「気長に待てば、滅多に起こらないことがひょっとしたら起こるかもしれないのだ」(P-257) というように、何か奇蹟が起こるのを待たなければならなかった。

他に何事も起こらぬ以上は、奇蹟の起こらぬはずはないような気がした。

運命が口をつぐんでいたい時に、語ることを強いてはならない、やがて訪れるものを待ち受けて、耳を澄まさなくてはならないのだ。(P-265)

さて、ここで奇蹟をもたらすものは何か。ここで、象徴的な存在として登場するのが、一匹の「猫」<sup>8)</sup>である。この小さな生き物 (der kleinen Wesen, P-266) は、ポルトガルの女、幼馴染、そしてケッテン殿のそばから離れようとはせず、三人の微妙な関係と、ケッテンとポルトガルの女の間に関在する何かであるようであった。そして、この「猫」は、普通の「猫」とは異なる雰囲気を持っていた。つまり、「いわば第二の実体 (ein zweites Wesen)、現世から離脱した実体 (ein Ab-Wesen)、身を包む静かな後光 (ein stiller Heiligenschein)」(P-266) を持っていたのである。更にケッテン殿は、この小さな生き物によって、自分の癒えかけた病を彷彿とさせられる。そして、実際にこの猫が疥癬にかかっており、受難が始まるが、三人にとっては、まるで人間が化けているのではと思われるこの猫に、自分の運命が宿っているのではないかと思われる。猫の終局に至って、次のようなやり取りが為される。

ポルトガルの男は、試練に耐えてでもいるように、頭を低く垂れ、それから女友達に向かっていった、どうしようもないでしょう。これは言った当人にも、我と我が身に下された死刑判決を承認したように聞こえた。皆が一斉にケッテンの領主に眼を向けた。彼は壁のような蒼白な顔をしていたが、つと立ち上がって出て行った。ポルトガルの女は従者に言った、猫を連れて行きなさい。(P-268)

しかし、ケッテン殿を救うのは、もしくは彼が現世に戻ってくるためには、この猫の殉死を以ってしても成され得ない。既に「しるしは確かに示されていたのである。」(P-268) とは「別の考え」(P-268) であり、少年の頃不可能だと思った、城下の登攀不可能の岩壁をよじ登ろうというものだった。彼は、「あの世から来た猫なら、この道に戻って来ることも出来ようが」(P-268) と思ったのである。即ち、猫を模倣したこの到達不可能な拳登によって、「第二の実体」(ein

zweites Wesen)、「現世から離脱した実体 (ein Ab-Wesen) から、「実体」(Wesen) へと、新たな生を得るための道筋を辿ろうとしたのである。彼の企ては、しかし、悪魔にしか到達出来ないかに思われたが、遂に達成させることにより、新たな性格を獲得することが出来るのである。

不思議にも、死とのこの戦いの最中に、力と健康が四肢に流れ始めたのだ。それはさながら外界からまた肉体へと戻って来たかのようにであった。遂に、およそ不可能とも思われぬ企ては成功した。[中略筆者] 力と一緒に荒々しさもよみがえっていた。彼は息をついた。腰の短剣はなくなっていなかった。(P-269)

これによって、ケッテン殿が獲得したのは、武人として彼が代々備えてきた「荒々しさ」、「短刀のような鋭さ」であったが、彼が自ら「第二の実体」から、「実体」へと帰還することによって獲得した、まさにケッテン殿自身の「性格」なのである。つまり、この新たな性格、もしくは彼の個人的な性格が新たに備わったことによって、本来、異なるがゆえに惹かれ合うが、しかし、対立する「男の世界」と、「女の世界」にも融和をもたらすことを可能にしているのである。

小説の終結部分で、ポルトガルの女がケッテン殿に向かって「神が人の姿を借りることができたのなら、猫が化身することも出来たはずだわ」(P-270) と述べているが、これは明らかに神秘的な力の存在によって、不可能なことを可能にし得たことを示しており、ケッテン殿が成し得た新たな、そしてより高い段階における性格を獲得したことによって、ポルトガルの女と彼との間に、融和と救済を与えたことをも意味しているのである。

『ポルトガルの女』において成されたのは、不可能なことに、新たな可能性を与えること、即ち、対立する「二つの世界」に、より高い段階での「融和」を与えるということ、もしくは新たな可能性を予感させることによって、神秘的なことがもたらした救済ではないだろうか。

## 注釈

- 1) 1923年に豪華本として限定200部だけ出版されたものが、翌年、既に書かれていた他の二編と共に載録された。
- 2) Vgl. Zeller, Rosmarie: Zur Komposition von Robert Musils „Drei Frauen“. In: Beiträge zur Musil-Kritik. Hrsg. von Gurdrun Brokoph-Mauch. Bern, Frankfurt a.M. (P.Lang) 1983. S.25-48
- 3) Vgl. E. Kaiser/E. Wilkins: Robert Musil. Eine Einführung in das Werk. S. 108
- 4) Wesen には、「実体」、「本質」、「本性」等々の訳語があるが、ここにおいては「実体」とするのが最も望ましいと思われるため、「実体」で統一させて頂いた。また、『ポルトガルの女』においては、「性格」を現す Charakter を用いず、性格の基を成す Wesen を用いている。
- 5) 本文より参考として抜粋。「敵の戦いぶりは場合に応じて無惨を極めていた。司教衣に身を包んだ残酷な名門の男には如何にも相応しいやり方だった。だが、またその戦法は、女のようなその衣が教えたのであろうか、柔軟性に富み、陰険で執拗だった。(P-256)
- 6) 短編『<sup>キャラクター</sup>性格のない人』*Der Mensch ohne Charakter* (1927) において、<sup>キャラクター</sup>性格を持たない主人公が小説の終結部分で、次のように語る。「だから今日、世界中でしっかりとした<sup>キャラクター</sup>性格が辛うじて見出されるのは、未開人のもとでしかない。何故なら短刀や槍で戦うものは敗北しないために、<sup>キャラクター</sup>気骨ある人間でなければならないからだ。しかし、如何に確固とした性格を持つにしても、戦車や火炎放射器や毒ガスに対して抵抗出来るであろうか!? だから、今日我々に必要なのは、性格ではなく、規律なのだ！」ここにおいて述べられる Charakter とは、「性格」の他、「性質」、「気骨」、「節操」、「品性」、「気骨のある人物」、「立派な人物」といった意味を持つ。ムージルはこの主人公を、今世紀初頭の典型的な人物とするが、この主人公の言葉には、「性格」が軽んじられる現代社会への警鐘と共に、「性格」を持つことへの憧憬の念も感じられる。
- 7) 「彼の実体 (Wesen) は、何週間馬を駆ってもたどり着くことが出来ない程、はるか彼方に離れていたのだ。」(P-258) 本稿中の引用部分同様、異国の地における彼の振る舞いが、彼の故郷、実体自体から離れていることを示すのと同時に、彼の実体の危うさを示す。
- 8) Vgl. Tagebücher. Anmerkungen, Anhang, Register. Hrsg. von Adolf Frisè. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. S. 1055~1062 なお、編者 Adolf Frisè によると、この草稿には、[Die kleine Geisterkatze in Bozen]、[Die kleine Katze aus dem Jenseits] と仮題している。

## 文献

### テキスト

使用テキストは以下の通り。引用に関しては本文中に丸括弧して略記号と頁数を付した。  
なお、訳出には、種々の翻訳を参考にさせて頂いたが、訳出は筆者の解釈による。

Musil, Robert:

Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiografisches; Essays und Reden; Kritik. Hrsg. von Adolf Frisè. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978 [Pと略記]

Der Mann ohne Eigenschaften. Roman. Hrsg. von Adolf Frisè. Reinbek bei Hamburg. (Rowohlt) 1978 [Mと略記]

### 参考

直接の引用以外に、伝記等、参考にした文献を列記させて頂く。

Dinklage, Karl:

Robert Musil. Leben, Werk, Wirkung. Hrsg. von Karl Dinklage. Wien: Amather-Verlag. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1960

Krottendorfer, Kurt:

Versuchsarrangements. Die Krise der bürgerlichen Gesellschaft in Robert Musils „Drei Frauen“. Hrsg. von Kurt Krottendorfer. Wien; Köln; Weimar: Böhlau Verl. 1995

(まえだ おりえ 独文学)